



刊行にあたって

日常臨床で欠かせない資料の一つであるX線写真は、視診ではわからないあらゆる情報を提供してくれます。しかし、その情報をどこまでキャッチできるかは、読影する医療従事者の力量によって異なります。

そこで、最低限身につけておきたいデンタルX線・パノラマX線の読影における“きほん”をまとめ、自ら学習できる本書を企画しました。

村上 充先生と村上恵子さんには本書の編集委員を務めていただき、全体構成とコーディネートをお願いしました。お二人のご尽力のおかげで、松島良次先生や鷹岡竜一先生、廣瀬理子先生、歯科衛生士の塚本佳子さん、池田育代さんに執筆に加わっていただくことが叶い、充実した1冊となりました。

「Introduction」では、X線読影の意義と必要性を改めて考えます。

1章「X線読影のきほん」では、デンタルX線とパノラマX線の特徴を整理しています。

2章と3章では、ベーシックなう蝕と歯周病のX線読影をまとめています。

4章では、昨今のトピックの一つであるセメント質剥離や、過剰歯、インプラントなどを取り上げています。

最後の5章では、経過を追った症例の供覧と、近年普及しつつある歯科用CTとX線を比較し、その一長一短を端的に示しています。

本書はX線の読影が苦手な若手歯科衛生士が一人で学べることを想定し、できるだけ平易な内容となるように努めました。しかしながら、知識が曖昧で整理できていない中堅歯科衛生士、新人教育を担当するチーフや院長など、あらゆる目的によって活用の幅は広がると思います。

本書が一人でも多くの“読める”歯科衛生士の育成に寄与できれば、望外の喜びです。

2019年7月
DHstyle 編集部